LL ニュース

No. 37

October 15, 2008

愛知大学豊橋語学教育研究室

— 中国特集 —

北京大学校内の未名湖と博雅塔
（写真提供：臼田真佐子）

CONTENTS

◎ — 中国特集 —

●北京大学のキャンパス（臼田真佐子） …… 2
●中華なパリの中国語（塩山正純） …… 4
●華やかな北京の街（桑島由美子） …… 6
●『北斗の拳』に関する7つのトリビア（三野豊浩） … 8
●中国語の辞書を作ろう（山田克利） …… 10
●NHKラジオ「まいにち中国語」を担当して（荒川清秀） … 13
●漢文訓読のこと（安本　博） …… 16
●留学後、留学前に日本ですること（上野由紀子） … 18
◎洋学のふるさとを訪ねて
ライデン探訪（葛谷　登） …… 21
◎2008年度外国語検定試験奨励金 …… 24

北京大学のキャンパス

文　学　部
臼　田　真佐子

2008年4月から1年間愛大の教員の海外研修制度によって、北京大学中文系で研修している。信頼できる先生方や資料豊富な図書館、こういう点で北京大学（略称「北大」）を研修先として選んだ。出発前によく言われたことは、「オリンピックですね。」、「どこに住むの。何を食べるの。」、「楽しいですね。」等々である。オリンピックと私の研修は偶然重なっただけで、チケットは入手しにくいと日本の新聞でも読んでいた。北大の新体育館では卓球の試合が行われることは、北京到着後知った。住むところの手配には苦心したが、食べるものはどうにかなると楽観していた。3か月北京に滞在してみて、環境としては期待通りであると実感している。楽しいと言えば楽しいのかも知れないが、うれし楽しと浮かれる年齢でもないし、研究成果ということを考えると構えてしまう。現時点では北京大学のキャンパスの様子を見たまま、気楽に綴ってみたい。

1.北京大学のキャンパスの地図

学内で『北京大学校園図』を購入することができ、私も4月に入学手続きした時に1部受領した。キャンパス、正確に言うと北京大学燕園校区の到る所に案内板も設置されている。過去何回か学会や図書館利用で来たことがあるが、新しい建物も増えているし、慣れないうちはどこに何があるのか分かりにくかった。逆に道行く人、タクシーに乗っている人から道を聞かれることはよくあり、これは私だけではないようだ。

2.西門

北京大学は中国あるいは北京の旅行ガイドブックにも載っていることが多いが、元来は観光スポットでないのは言うまでもない。風格のある西門では記念撮影をしている人をよく見かける。東門、南門はあるが北門はなく、北側の道路を隔てた向かいは円明園である。

3.勺園とその付近

西門から少し歩くと、勺園に行き当たる。外国人は勺園と呼ばれる宿舎に普通は滞在するが、勺園内に食堂も何カ所かあり、これは外部の人も利用している。

勺園については部屋が不足気味で、自費だと学外に見つける必要があると聞く。私の研修は交換研究員制度ではなくて、自分で手続きをする必要があり、インターネットで勺園の情報を得たうえで、知り合いの先生にあらかじめ宿舎の予約をお願いして、北京到着後すぐに勺園に入ることができた。ホテルタイプのツインの部屋を一人で使っていて、かなりよい部屋なのだが、長期滞在には工夫が必要である。本棚を特別に借りて来て、送って来た300冊近くの本や衣服その他の物を押し込むのに苦心した。でも、学外に引っ越そうとは思わない。中文系のオフィスや学内図書館、学内スーパー、そして校内の病院まで至近距離というのは好条件で、学内にいて安心して暮らすことができる。買い物については勺園そばの学内スーパーでたいていのものはそろう。ATMも勺園のそばにあり、国際キャッシュカードで人民元を引き下ろすことができる。

4.食事をする所

自炊をするには宿舎の調理設備が整っていないが、学内に食堂等がいろいろあるので、不便はないと思う。勺園2号楼の食堂はご飯とおかず1種で2.2～5.5元くらい、カリフラワー炒めとか、白菜炒め、麻婆豆腐などがあり、食券を利用する。お茶はないので水筒も持参した方がいい。1989-1990年、私が中国政府の奨学金を得て復旦大学(高級進修生)に留学していた時もこういう食堂を利用していた。2号楼には韓国料理もあり、野菜満載のビビンバはけっこういける。韓国料理だけでなく、酢豚のような料理もあり、午前中から夜までずっと営業しているので便利である。ここは現金で支払う。勺園7号楼にはレストランもあり、ここでは本格的な中華料理を食べることができる。勺園以外ではカードで利用するところが大部分で、キャンパスカードを持っていないと利用しにくい。私が気に入っているのは農園というカフェテリア形式の食堂で、美味しいし、安価である。その他コーヒーショップもあり、気分転換に向く。パンとかヨーグルトとか、フルーツも学内のスーパー等で売っているので、予算と栄養、胃腸の具合を考えて楽しく食べるのが肝要である。もちろん学外にもお店はいろいろとあり、ご馳走になったこともある。

卒　業

2008年6月末、勺園の向かいで卒業生が集っていた。学位服については北京大学のホームページに詳細が掲載されている。

5.キャンパスの自然　　未名湖ほか

学内には未名湖という湖があり、湖畔は散歩するのによいエリアである。4月到着時、キャンパスの到る所で春の花が一斉に開き、その後も様々な花が咲き、まるで東京の新宿御苑や自然教育園の一角に住んでいるかのようである。4月の桃の花、ライラック、藤、ニセアカシア、5月のバラ、そして6月のニワナナカマドは東京あたりの花と比べてみると面白い。ライラックやニセアカシアは北方にいることを感じさせるし、東京あたりなら紫陽花が咲いている頃、北京ではニワナナカマドが白い花房を付ける。なお、新しい留学生宿舎の建設が東門の外で進んでいるそうだが、風情ある勺園の魅力も捨て難い。

6.博物館

西門からほど遠くないところにサックラー考古学・芸術博物館があり、青銅器や古代の貨幣等が展示されている。北大考古学系の学生が発掘実習している時の写真もあった。入場料5元である。

7.百周年記念講堂

この講堂では式典や講演会等が開かれる。5月にロシアの首相が訪中した時、ここで講演を行った。私はそのとき四川大地震の報道を見るためか、偶然テレビをつけていて、同時中継で講演を聞くことができた。映画やコンサートも開かれ、チケット情報は学内のサイトにも載っている。なお、2008年は北大110周年に当たる。

8.図書館

1990年上海から留学生事務室の紹介状を携えて利用したことがある。2006年には日本から出かけて来て、貴重な漢籍を閲覧し、その時、北大の先生方にもお目にかかり、こういう立派な学校で勉強できたらと切に願った。願いがかなって、こうして北京にいて、図書館にはキャンパスカード1枚で入館できる。ゲートでカードをかざすのだが、表示が「臼田真佐　請通過(お通り下さい)」で、名前の最後の「子」が欠けている。中国人、といっても漢民族ならばふつうは2、3字、長くて4字に収まるのが普通で、合計５字の私の場合は「はみ出し」状態だと苦笑している。

9.教室

私には研究計画があり、それに沿って自分で進めているが、授業については著名な先生の講義を数回聴講させていただいた。第2学期は2月にすでに始まっており、4月にやって来た私はもたもたしているうちに、聴講のお願いをするのが遅れてしまった。講義の内容は理解できたし、先生も休み時間に質問に熱心に答えておられ、教室の設備が整っているのにも感心した。休憩時間に飲もうと思ってお湯を保温水筒に入れて持参したが、学生さんも同じことをしていた。廊下の端の方に給湯器があって、ボタンを押すと無料でお湯または湯ざましが出て来る。中国で生水を飲むのは厳禁なので、こういう設備は必要であろう。

教室は整備されていても、教員用の個人研究室はないようで、大部分の先生方はキャンパスから結構離れた場所に住んでいる。そういうことを考えると学内に住んで、各種施設を利用できるのは恵まれた環境だと思う。

以上、限られた字数であり、その他のこと、たとえば到着直後、荷物とお金、学問のことなど、私個人のホームページで随時アップしている。
（トップページ　http://taweb.aichi-u.ac.jp/usuda/ ）

中華なパリの中国語

国際コミュニケーション学部
塩　山　正　純

今年３月にパリを訪れた。いつも同じく２区のリシュリューにある国立図書館旧館での資料調査と古書店巡りというのが目的である。３年ぶり数回目のパリ往きで、仕事の合間に筆者が街歩きして味わったパリの中華な雰囲気を少し紹介してみたい。

図書館通いの便利さを考えて、今回はオペラ・ガルニエからマドレーヌ寺院への大通りに宿をとった。このあたりオペラ・ガルニエ周辺の界隈は、パリの中心部の１区、２区のなかでも交通至便で、徒歩圏内にルーブル美術館やコンコルド広場、マドレーヌ寺院などの観光スポット、プランタンやラファイエットなどの百貨店もあり、パリ市民、旅行客いずれを問わず連日、ひと、ひと、ひとの賑わいである。

折角のパリだから、ふつうは「これぞヨーロッパ」的なものに目がいくのが人情というものであるが、少し目線を変えて周囲を眺めてみると、一般的にイメージされているのとは少々違うパリの姿が見えてくる。眼を凝らせば、四方に漢字の看板が溢れ、耳を澄ませば、いや耳なんか澄まさなくても、自然にそこかしこから賑やかな中国語が聞こえてくる。

パリに限らず、ヨーロッパで街歩きをすると、いつも感じることがある。生活している人にも、旅行している人にも、東洋系、とくに中国人のなんと多いことか。中国というか、中国人の暮らしの中華な匂いが、どこの街でもしっかりと土地の日常に根付いているのである。パリでは、年々日本人の影が薄くなっているのか、中国人の陰にほとんど埋没しているような気がする。今回のパリでは筆者もよく「中国人か」と尋ねられ、時には中国人からもそう尋ねられた。まあ、中国人から「中国人か」と尋ねられるのは、職業柄やはり少し嬉しかったりもするが。

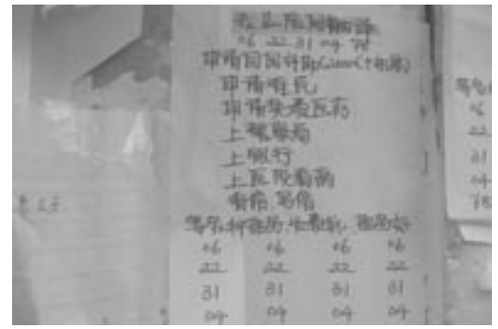
さて、パリの街に並ぶ日本語や中国語の看板は、多くが日本食や中華のレストランである。気になりだすと、あっちも、こっちも、実に沢山のJaponaisやchinoisが溢れている。chinoisは中華料理屋。これは中国人の店だろう、と想像がつく。一方のJaponaisは日本料理店なのだが、お店の看板や店の造作が、我々ネイティブ日本人にはどこかしっくりこない店が実に多い。それもそのはず、商魂逞しい中国系の人たちが昨今のパリの日本食ブームに便乗して、続々と開店している日本料理店なのだから。いまパリでは、Japonaisもchinoisも大半が商魂逞しい中国人のレストランなのだ。

パリにへんてこ日本料理店が続々と開店し、それがまた地元市民に人気があったりするので、それに業を煮やした日本政府かどこかが「正しい日本料理（日本文化）を伝える」ために、認定証を出すなんてことを言い出した程である。ことほど左様に、パリでは中華なへんてこ日本料理店が隆盛しているのである。オペラと図書館のちょうど真ん中のサンタンヌ通りには、日本人が経営する日本食のお店が軒を連ね、Japonaisの看板が並んでいるが、日本人の店にはわざわざ「当店は日本人が経営しております。安心してお入り下さい」と書いた貼紙がある。中国人が経営する日本料理屋が沢山あっても、一緒にしないで頂戴、ということなのだろう。パリでも、中華な空気というか雰囲気が高速増殖中なのである。

パリ滞在の大義名分は図書館での資料調査であるから、日中はもちろん図書館にいる。午前の調べものが一段落すると、図書館前の中華総菜屋で昼ごはん。もちろん注文は中国語の「普通話」でＯＫ。３日目、カレーチャーハンと野菜炒めを注文し、偶々居合わせた中国人老板の兄さんと中国語でお喋りしながらの食事となった。その日の夜は近所の「A-KITA」という焼き鳥＆寿司の店に入った。実は、いまパリの日本食では、この「焼き鳥＋寿司」のパターンが主流。普通は日本人が経営する日本の「秋田」をイメージするが、この手の焼き鳥兼寿司屋を経営しているのは大抵が中国人。「AKITA」に入って席に着くと、レジに陣取る老板がずっとこちらを気にしている様子。よくよく見てみると、なんと昼間の総菜屋の兄さんではないか。同じ日に偶然２度、それも違う店で、まったく、こういうのを縁というのだろうか。この兄さんは陳さんと言って、中国大陸の上海に近い温州から、パリに来てもう１８年。その間帰国することもなく、幾多の艱難辛苦を経て、いまではパリのど真ん中にお店を２軒もつ経営者となった。総菜屋は周辺のオフィスで働くフランスの若者で賑わい、「AKITA」も地元パリっ子や欧米人の観光客で繁盛している。日本人客はどちらの店でも私一人だったが、パリの人にしてみたら、実際サービスがよくて、まあまあ味もいければ、どこの国の誰の店だろうが関係ないのだ。串では、鳥、つくね、鴨、牛チーズが定番メニューで、サーモン、マグロ、エビの串も人気がある。寿司・刺身ではサーモンが１番人気で、マグロ、タイなども好まれる。お得なセットメニューの定食もあり、串もの数本に、ライスは日本のみそ汁のお椀に仏様の御飯のように山盛りである。出汁の無いみそ汁がついているが、スープ風にれんげで飲むのは中華な発想か。どこの店でも、湯がいたキャベツの千切りがつく。この不思議な定食の値段は、大抵が８から16ユーロくらい。この「日本料理店」は、お客の大半がフランス人で、店の公用語はもちろんフランス語。店員はほとんど中国人で、英語と中国語も大丈夫。日本料理なのに日本語が一切通じないのは、如何なものかとも思うが、これもまあ愛嬌か。

パリの中心部では、こういった中華な「日本料理店」など新興勢力が拡大中だが、もちろんパリにも大きい中華街があり、ここに中国系住民がまとまって暮らしている。代表的なのは２カ所で、１つは、南の13区、地下鉄７号線のトルビアック駅から東へすぐのイヴリー通りにある。ここは1970年あたりに、ベトナム、カンボジアから難民として逃れてきた人たちが根付いた場所で、この街で立ち話した爺さんや婆さんとは、普通話で不自由なく話が通じた。彼らによると、住人の多くは、故郷の中国の方言と普通話、ベトナム語やカンボジア語、それからフランス語を話せるそうである。一見うらやましくもある事実だが、彼らがそう望んだのではなく、そうならざるを得なかった事情のところに悲しい現実がある。とはいえ、ここは他言語が混在しつつ、中国の南方の雰囲気が色濃く感じられるエスニックな街である。

もう１つは北の19区、ヴェルビル界隈で、地下鉄２号線と11号線のヴェルビル駅周辺に広がっている。こちらには主に中国大陸からの人々が集まっていて、スーパー、レストラン、食堂はもちろん、雑貨屋、服屋、時計屋、貴金属店、八百屋、肉屋、豆腐屋、電話屋、本屋、按摩屋、美容院に洗濯屋。この街の中だけで十分暮らしていける充実ぶりである。南の中華街にはなく、こちら北の中華街で目立つのが貼紙広告である。多くは「区役所窓口や病院の診察への付添い通訳承ります」の宣伝で、ここからも、この街には中国語しかできなくて、フランス語が堪能な同胞の幇助がなければオフィシャルな場面に出て行けない人が沢山いることが分かる。言い換えれば、すなわち平穏無事な普段の生活ならこの街だけで十分完結しているということだ。



フランス語付添い通訳の広告、中華街の至る所に貼られている。

どちらの中華街も大きさはかなりのもので、街の大部分が中国系の商店やレストランである。聞こえてくるのは中国語ばかり。私たちは中国語というと、どうも中国大陸だけをイメージしてしまいがちだが、実は世界中で話されていていることがこの街でも実感できる。街を歩いて耳にした範囲の印象では、多くの人が方言よりも普通話を話しているようである。様々な土地から集まる人々の共通語として普通話が重宝されているのかも知れない。皆さんが教室で学んでいるのも普通話。テキストのフレーズを覚えれば、パリの街角で中国語が通じるということだ。

５日ばかりの滞在で、家への電話以外に、そういえば日本語を喋らなかった。何語を喋って過ごしていたのだろう。フランス語は数字と簡単な挨拶だけ。かといって、まさか無口で居られる筈もなく、必要最低限の街歩きの英語に、大半を中国語で通したのである。国立図書館は、中国語が堪能な司書のモネさんのお陰で「没問題」。食事は中国人のお店で食べて中国語でコミュニケーション。フランスでいることを忘れるくらいに中国語で通して楽しいことこの上なかった。「ああ、中国語をやっててよかった」と思える至福の時間を過ごしたのであった。

これからの世の中、中国語は何も中国大陸だけではない。中国語を学んでいる皆さんは、中国を突き抜けて、もっと世界に目を向けて欲しい。覚えたての中国語を片手に、パリに限らず、ロンドンやニューヨーク、世界各地に出かけて行って、中国語の会話や中華な雰囲気を味わおう。目標は中国語で世界一周、中華な世界で中国語、ですよ。

華やかな北京の街

経済学部
桑　島　由美子

(1) 北京での研修

2007年９月から2008年３月まで大学派遣の海外研修先として、私にとっては地理感のある北京を選んだ。北京市の中心にある中国社会科学院文学研究所に学術訪問というかたちで在籍し、研究上の交流や資料調査に従事した。研究所の図書館は、高層ビルの中に分野別にフロア―が設けられて、私の研究テーマに必要な、新聞、雑誌など出版文化史研究の一次資料は、全国でも屈指の蔵書を誇ると言う。図書館で過ごす以外には、市内の書店めぐりが日課となり、新刊の書籍も300冊以上、映像資料についても数百枚を収集することができた。研究所の先生方は週に一度出勤し、会議や院生の指導などに当たる以外は時間的にも自由で、おかげで私の宿舎探しなど生活面でも時間を惜しまず、親切に対応して下さった。文学研究所に勤務する大学院時代の友人を介して、中国近現代文学、小説、新詩、左翼文学、台湾文学、日本の戦後文学等の専門家と知り合い、大いに啓発を受けた。

同研究所では、特に９月から12月にかけ国際交流基金の協力により、前衛演劇の上演、批評討論会、国際問題に関するシンポジウムなどが行われていた。またメディア研究に関しては、現地の日本企業（マスコミ）関係者や、中国伝媒（メディア）大学との交流による収穫が大きかった。たまたま中国社会科学院に隣接していた一橋大学北京事務所へも時折通うことになったが、ここでは日中経済交流の現場を見ることができ、月例会では日本と中国の研究者（卒業生）によるレクチャーが行われていて、近代史、統計学、企業管理など様々な分野について講義を聴けたし、私自身も講師を務めた。

同じ文献を読むにも、現地に身を置けばやはり臨場感が伴う。急速な市場化の中で、人々の意識はどう変わったのか。消費社会の成熟に対応して、どう変わろうとしているのか？北京の華やかな商業文化を目の当りにしてその一点に関心が集中した。

(2) 北京の商業地区・四季の風景

長期研修に先立ち、2006年夏、2007年春、にも出張で中国に滞在する機会があった。数ヶ月をおいて見る度に北京の町並みは変わって行き、郊外の緑地が消えていて、土埃で覆われていたり、いつのまにか新しいビルが出来ていたりした。あちこちで「取り壊し」が行われ、歩いているといきなり頭上からガラスの破片が降って来ることもあった。2007年の春に来た時は、北京駅近くの旅館に宿泊したが、駅周辺では上京してくる人々が終日列を成し、路上にも人が溢れていた。春先ということもあり、経済の上昇機運と相俟って余裕と倦怠、生暖かく弛緩した空気が漂い、日本の沈滞した空気とは対照的だ。

９月に来たときは、温暖化の影響か、まだ真夏の暑さで、日傘が欠かせなかった。研究所に近い雅宝路に部屋を借りて住み始めた時には、ちょうど中秋節だった。もともとここはロシア人街で、アパートのバルコニーにロシアの国旗が立っていたり、両国の長い交易の歴史を感じさせる。軒並み毛皮店や服飾の卸店で、ロシア人のほか、革製品などを商うイタリア人も多い。いったん「節日」に入るといつまでも「お休み」のようで、日本に比べやはりノンビリしている。メイン通りの商業ビルや毛皮店などは軒並み閉まっていて、ゴーストタウンのようだった。ショーウィンドーでは全身宝石をちりばめた西洋風「招きねこ」が手を振っている。毛皮店の軒先には籠が置いてあり、中でうさぎがキャベツを齧っている以外には、人影もまばらだった。

雅宝路から建国門外を望む。北京では珍しい雪景色。

年末に入り、クリスマス前後には外国人ビジネスマンもクリスマス休暇なのか、オフィス街から姿を消したけれど、ここかしこに「感電注意」の札がついたクリスマスツリーが飾りつけられ、商業地区は一挙に華やいだ雰囲気となった。北京の新しいセレブスポット「世貿天階」にビルの屋上まで届きそうな巨大なクリスマスツリーが出現した時は、さすがに北京とは異次元の空間に目を疑った。そのツリーの向こうには総ガラス張りの高層ビルが屏風のように折り重なり、抜けるように青い冬空をきらきらと反射している。でもその広場の手前には土埃が舞い上がり、近郊の農家から棗や蜜柑を載せた荷車が乗り付け、馬が片足をあげて静止している。そんな奇妙な風景をいたるところで目にした。

12月からはしばしば寒風で外に出られず、日照時間も短く、正午前後しか陽を仰げない日もあった。曇りの日なら昼も真っ暗で、まるで白夜のようだった。ところが春節頃には寒さも急に緩み、日差しにも春の到来を実感した。この頃南方では氷雪の被害で大変だったようだけれども、北京はむしろ暖かく、夜通し爆竹と花火で眠れない日が続く。公寓の窓からは大使館区と建国門外の高層ビル群が見えるが、大晦日の夜には花火の照り返しで、まるでビル火災のようだった。真夜中、どうしても寝付けず、しばし窓から「煙火」に煙る高層ビルを眺める。大使館区は爆竹禁止だと思うのだけれども、この爆音は？花火はいったいどこから打ち上げているのだろう？この頃は研究所の友人もみな故郷に帰ってしまい、いつもは二環の通勤ラッシュのクラクションの音で目覚めるのに、車の数も嘘のように減っている。春節が終わる頃、天津に小旅行に出かけた。

天津日本租界の張園（宣統帝溥儀の居住地）

(3) 日本の轍を踏まないために

普段はレストランも百貨店も朝の朝礼から接客まで、マニュアル通りに商売に励んでいて、商業化の波が街を覆い、無秩序な中にも、熱気が漂っている。公共サービスもスピーディーなら、ネット書店も、百貨店で注文したセーターもあっという間に宅配便で送ってくる。何か訊ねれば、商品の説明にも熱心で、電話でもしきりに勧誘してくる。大きな書店に入ると、まるで生鮮食料品でも扱うように、次々に新しい書籍が並べられている。なぜか「経営管理」と「宗教」のコーナーが一階のフロア―を独占している。

ある日『整形日本』という日本の「若者文化最先端」を紹介した本を見つけた。サブカルチャーに過ぎないものを持ち上げたりしないところが賢明だ。そこでの「日本のイメージ」は新幹線とコスプレ、ビルと民家の建てこんだ風景……ここ北京での伝統的建造物の消失、商業化や無国籍文化の氾濫を見ると、物質的繁栄の果ての文化的荒廃、日本社会の病態はもはや他人ごとではない。

『整形日本』より・日本のイメージ

経済成長の歪みをどこかに置き去りにして、社会の変化は益々加速化している。公害や土地問題、バブルの崩壊など、戦後日本の轍を踏まないようにという、テレビの特集も何度か目にした。

寒さよりは乾燥がきつく、やはり「有鉛ガソリン」による大気汚染のせいか、咳き込むことも多くなった。３月末日に豊橋に帰ってみると、目が高層ビルの「タテ」に慣れたせいか、平屋続きの風景、清浄な空気、そして新緑が目に眩しかった。

『北斗の拳』に関する７つのトリビア

文　学　部
三　野　豊　浩

皆さんこんにちは。私は中国の古典が専門なので、中国をテーマにした漫画が大好きです。武論尊・原哲夫両先生の『北斗の拳』も大好きで、完全版で全巻持っています。もちろん『北斗の拳』はあくまでも現代日本の漫画で、厳密には中国古典文学ではありませんが、何といっても三国時代に起源を発する劉家北斗神拳。広い意味の中国文学ということで、大目に見ていただきましょう。今回は中国特集とのこと。一般向きの娯楽的な読みものということで、マジメな学術雑誌には発表できそうもないトリビアの数々を書かせていただきます。『北斗の拳』は中国語では《北斗之拳》で、ピンインはBěi dǒu zhī quánです。なお続編『蒼天の拳』については、今回はノーコメントとさせていただきます。

(1) 跳刀地背拳（ちょうとうちはいけん）について

ジャッカルの部下、フォックスの使う拳法の名前です。具体的には、まず地面に寝そべって無防備な姿をさらし、相手を油断させます。それから驚くべき背筋力をバネにしてぴょ～んと空中に跳ね上がり、両手の刀で敵の首を斬り落とす、というものです。ところでこのネーミング、「おや？」と思いませんか？『史記』の「淮陰侯列伝」には、有名な「背水の陣」の話が出て来ます。「股くぐり」の韓信が趙の国を攻めた時のこと。あえて兵法の定石に反し、川を背にした布陣で敵を油断させた上で、自軍の兵士たちを必死の覚悟で戦わせ、勝利したという故事です。古文であれ現代文であれ、中国語では動詞が目的語の前に来ますから、「水を背にする」という場合、「水背」ではなく「背水」という語順になるわけですね。フォックスも「地を背にする」のですから、本当は「地背」ではなく「背地」でないとおかしいわけです。ひゅ～跳刀背地拳！でも「はいちけん」って何だか「あいちけん」みたいで変ですね…。う～む、文法をとるか、語感をとるか、ですな。

(2) 華山角抵戯（かざんかくていぎ）について

華山は、中国の五岳の一つ。五岳とは、古代において天地四方の守りとして崇められ、天子（皇帝）みずからが行幸して祭祀を行った五つの名山をさします。すなわち、泰山（東岳）、華山（西岳）、衡山（南岳）、恒山（北岳）、嵩山（中岳）の五つです。『北斗の拳』には、五岳のうち泰山、華山、嵩山の三つまでもが登場するのですから、立派なものです。泰山は、リュウガの泰山天狼拳。嵩山は、カサンドラでラオウに極意を奪われた崇山通臂拳。そう、これも本当は「崇山」ではなく「嵩山」なんですが、ま、いいでしょう。そして華山は言うまでもなく、牙一族の族長「オヤジ」が使う華山角抵戯ですね。相撲を「角力」とも書くように、「角抵戯」は相撲の源流で、古くは中国の正史『漢書』の「武帝本紀」に「（元封）三年春、角抵の戯を作し、三百里内皆な来観す」とあります。元封三年は、西暦では紀元前108年。中国では、そんな大昔からすでに相撲が行われていたのですね。漢の武帝が主催した大相撲、さぞ豪勢なものだったことでしょう。ただ「華山」と「角抵戯」がどう結びつくのかは、私にもよくわかりません。

(3) 戦癰（せんよう）について

トキになりすましたアミバがついた秘孔の名前です。はじめて見た時は、私も「マンガにしては難しい漢字を使うものだな」と感心しました。専門家ならばいざ知らず、平均的な日本人で「癰」などという漢字を一生の間にただの一度でも使う人は、おそらくほとんどいないでしょう。とすれば武論尊先生は、日本人の偉大なる「一字の師」と言えるのではないでしょうか？…冗談はさておき、「癰」は本来、悪性のはれもの、の意。「戦癰」は簡体字では「战痈」で、ピンインはZhànyōngです。カタカナで書けば「ジャンヨ～ン」だよ～ん。でも、「たたかうはれもの」では意味が通じませんね。何か得体の知れないおぞましさだけは、ひしひしと伝わって来ますが…。ちなみに「吮癰舐痔」は、はれものの膿を吸い、痔をなめる。阿諛追従の甚だしいことを意味する四字熟語です。これもまず使えませんが、トリビアついでに紹介しておきましょう。

※小学館発行 完全版『北斗の拳』より

(4) 七星点心（しちせいてんしん）について

北斗神拳の先代伝承者リュウケンが、ラオウの拳を封じようとして逆にラオウに斃されてしまうという、手に汗握る場面で使われた奥義の名前です。それにしても奥義の名前が「七星点心」とは…。だって「点心」（diǎnxin）は中国語で「お菓子」の意味ですからね。カタカナで書けば「ディェンシン」。『東方中国語辞典』によれば、「点心、菓子：ケーキ・ビスケット・月餅・シューマイの類の食品」です。緊迫した場面だけに、ネーミングのミスマッチが何とも言えません。それとも、あえて場面にそぐわないマヌケな名前を奥義につけて、読者を笑わせようと考えたのでしょうか？多くの人が指摘するように、『北斗の拳』はすぐれたギャグマンガでもあるわけで…。飲茶のお店で、蒸籠のふたをぱかっと開けると、中には北斗七星の形に並んだ７つの小さなシューマイが。チャイナドレスの小姐がにこっと笑って、「这就是七星点心（これが七星点心でございます）」なんて…。

(5) 吾曹（うかお）について

「吾曹」は、修羅の島（海の彼方、中国大陸の方にあるそうです）の「ボロ」たちが無気味な会話をかわす場面に出て来ます。訓読すれば「わがともがら」つまり「われわれ」の意味ですが、その横に、何と「うかお」とルビがふってあります。最初にこれを見た時は、思わず交首破顔拳、いえ破顔一笑してしまいました。明らかにこれは、中国語のピンインを読み間違えたものと思われます。「吾曹」のピンインは、wúcáo。カタカナで書けば「ウ～ツァオ」のような感じになります。初歩者にありがちな誤解ですが、英語ではcommercial, communicationのようにｃと書いてｋと発音する単語がたくさんありますから、つい中国語も同じだと思ってしまうのですね。学習の最初の段階でbo po mo foをしっかりマスターしておけば、こういう誤解は生じないはずなのですが…。たとえば、試験は「考试」（kǎoshì）のように、中国語ではｋと発音する場合は必ずｋと表記します。『三国志』の曹操（Cáo Cāo）も、「カオカオ」と呼ばれたのでは立つ瀬がないでしょう。そういえば、樹なつみ先生の『花咲ける青少年』には倣立人の側近の「曹」という脇役が登場しますが、こちらはちゃんと「ツァオ」とルビがふってあります。

※小学館発行 完全版『北斗の拳』より

(6) シエ様の交牙断随（こうがだんずい）について

シエ様は修羅の島の住人で、潜望鏡をたくみに操作しながら沙漠の中を移動します。その風貌はさながら蟹の化け物のごとく、セリフの語尾にもいちいち「ガニ～」がつきます。蟹は中国語ではシエだガニ～。ピンインはXièで、「螃蟹」（Xiè xie）の「蟹」と同じ発音だガニ～。上海蟹はShàng hǎi xièだガニ～。ガニニニ。さてシエ様の必殺技は、両手の巨大なハサミを交差させて敵に襲いかかる「交牙断随」。ここでまたしても「おや？」です。訓読すれば「きばをまじえ、ずいをたつ」わけですから、この場合「随意」の「随」ではなく、「骨髄」の「髄」でな

ければ意味が通じません。それとも、少年向けの漫画雑誌なので、極端に画数の多い漢字はなるべく使わないように、という方針なのでしょうか？それにしては前述の「癰」のような、ものすごい字も使っているわけですが…。

(7) 断末魔の謎について

最後になりますが、有名な断末魔は、なぜか「バ行」が圧倒的に多いようです。これは必ずしも中国文学の問題ではありませんが、音声学的に大変興味深い現象だと思います。『怪獣の名前はなぜガギグゲゴなのか』（黒川伊保子、新潮新書）という本がありますが、北斗の断末魔はなぜバビブベボなのでしょうか？最も代表的な「ひでぶ！」「たわば！」「あべし！」も、すべてバ行の音が入っていますね。「ばほぶべっべっ！」とか、「ぱっぴっぶっぺっぽおっ！」なんてのもありました。他にもあるわあるわ…。紙数も尽きましたので、そろそろ失礼をば。さらば、うわらば！

〔追記〕この原稿を書き上げた後、東京の内山書店で偶然、台湾版（繁体字）『北斗之拳』第１巻を見つけました。もちろん海賊版ではありません(笑)。右が台湾版、左が日本のオリジナルです。読んでみると、日本語と翻訳の間にさまざまな相違点があり、いっそこれをネタにすればよかった、と後悔しました。タイトルの「心の叫び」は、「心之吶喊」と訳されています。『吶喊』と言えば、かの魯迅先生の作品集のタイトルと同じ。何とも格調高いですね。

※「北斗の拳－完全版－」（発行／小学館）より
©Buronson&Tetsuo　Hara／NSP1983

中国語の辞書を作ろう

非常勤講師
山　田　克　利

１、愛大と中国語の辞典

上の写真は、愛知大学の編集になる「中日大辞典」である。右がその初版（1968年）、真ん中が増訂版（1986年）、左が増訂二版で、増訂二版は市販もされているし、図書館の開架にも置かれているので、実物を手に取ることも簡単にできる。こうして並べて見ると、厚さが変わっていることはすぐ目に入るが、それに応じて当然内容にも変化がある。増訂二版についても、改訂の作業が続けられてきているので、一番左の厚く重そうな物が十分に完成してゆるぎない決定版となっているわけではない。その改訂の結果はこの１，２年のうちに具体的な書物の形となって読者の前に増訂三版として姿を現すだろうが、それも不動の権威として見るとすれば、それは辞典を活用する理想のあり方ではないだろう。

「中日大辞典」にはいろいろな特質があるが、その中でも大きなこととして、編集の開始の古いことがある。愛知大学の歴史より古く、今からおよそ70年近く前上海の東亜同文書院で企画され、関係の先生方が愛知大学の設立に参加されるなかで、愛知大学で編集事業が継続された。そのころまともな中日辞典は存在せず、更に重要なことは、中国自体にも現代中国語辞典と言えるものがなかったという情況の中での編集作業であったことである。つまり、中日辞典としてだけでなく中国語辞典として、また、一つの中国語辞書という書物としてだけでなく中日辞典・中国語辞典という概念としても、未知への模索が行われた。読者は、そういう辞典に訳語としての「正解」を求めるだけでなく、共に愛大にあり模索を共にする思いを持つきっかけとしてはどうだろうか。

愛大の学生は、愛大のキャンパスの中で生き、勉強し、辞書を使う。同じ愛大キャンパスの空気に息づきながら動いている「中日大辞典」を感じることは、自分の使う辞典が本当に自分のための辞典となる道にきっとつながるだろう。

愛大にゆかりのある中国語辞典は、「中日大辞典」だけではなく、最新鋭の辞典として「東方中国語辞典」（2004年）もある。この辞典の主要な編集者の一人は、国際コミュニケーション学部の荒川清秀先生で、読者の中には先生の講義を受ける機会があり、生きた先生の姿から感化を得ている人もあるだろう。昔の言葉で言えば「謦咳（けいがい）に接する」である。先生の辞典をよく活用すれば自分の勉強のために有益なのは言うまでもないが、次々と優れた辞典が刊行され、中国語辞典界が全体としても動くなかで、その最前線を切り開いている生きた人の謦咳に接する、接しないまでも感じることができるだけでも、辞典に向かう自分の新たな次元が開けよう。

自分も生きている人間として辞典を作るということである。

２、誰でも辞典を作っている

誰でも辞典を作っている、とりわけ母語辞典である。母語が母国語ではない人もいるが、多くの日本人は日本語を母語として獲得しながら、育つ。母語、言い換えればその人の第一言語、の獲得は学習というより深く、学習する人間の精神そのものを大きく作ると見られる。精神そのもの、あるいは精神に非常に近いので、人の精神は自分の言語である部分が自分でよく見えないということもよく起こる。人とのコミュニケーションは、新たな情報を得られることはもちろんありそれは自分でも見やすいのだが、自分に近すぎて見えないものを対象化するということにも意義のあることがある。日本語を母語としていない人（日本人は多くの場合「外国人」という）から、「うれしい」と「たのしい」はどうちがいますかと問われて、すぐには説明できない。説明できないが使い間違えることはまずないと、そんなふうにして自分と母語とがどうなっているのかを対象化して見ることになる。

使い間違えないのは、精神の中に母語辞典があるということと理解できよう。この辞典はどのようにして作られてきたのだろうか。お母さんからそのものを見せられながら発音を繰り返されて、発音と意味の連結が連想のようにして残ることを母語獲得の原型として想定することができるが、お母さんや、先生や、辞書から、そのようにして直接覚える言葉は、その人の言葉全体から見れば一部だとしか考えられない。そのほかの多くの言葉の習得はどのようにしてできたのか。それは原型的獲得からの類推と経験によるとものと見られる。いちいち一個一個ではなく対応できるものの形成によるのであって、それを母語辞典と呼ぶことができよう。

ここで、辞典を作るには類推ということがキーワードとなる。類推とはその一個に対応すると同時に他への適用であり、その両者にまたがって存在し機能するものこそ母語辞典である。母語と第二言語とで、習得のための方法を並列的に応用できるものと考えてはならないが、類推は両者に共通する基本軸

ともなる。国語の先生や特に外国語の先生から「辞書を引きなさい」とやかましく言われ、「耳たこ」の人もいるだろうが、そういう先生方の指導は、「類推」の危なさや横着さを戒めることが多く、それはもちろん意味がある。類推は類推でしかないからである。しかし、この“横着さ”は人が生きる、精神が成長することと重なっている重要な意義があり決して軽視してはならない。望まれるのは良い類推の実現であろう。

類推でしかないことを補うものの一つは、先生方が教える辞書である。しかし、この辞書は母語辞典と比べると、大きな弱点がある。それは、言葉が持つ意味の広がりの中で、どちらのほうにどの程度のウェイトがあるか明記しにくいことであるが、これは逆に、母語辞典の類推の弱点補正の方法を示しているとも言える。母語辞典は、日々の生活の言語活動の中で大小の補正を繰り返し、経験によって類推を補正すると同時に用法の典型性と例外性についても認識を蓄積する。「その意味にはあまり使わない」などと。結果として、良かった類推は、その類推の底にあったものの適用が妥当であったという認識を精神に残すのも自然なことである。その適用はほかの場合にも使える可能性が高いからであり、それを人の精神内の文法と呼ぶことができる。

3、日本語から中国語へ

現代の中国語には、日常的に使われる重要語の中にも、日本語から取り入れられたものが相当数ある。日本語からといっても、主に明治期に日本が西洋文明を受け容れるに当たって、漢字を使って作り出した翻訳語で、現在日本でも使われているものに次のような例がある。

「経済、知識、説明、投資、規範、法律、希望、哲学、復習、支持……」

（陳生保「中国語の中の日本語」による）

もちろん、日本が歴史的に中国語から取り入れ日本語の中の漢語となったものの数と比べればはるかに少ない。日本語から中国語に入った言葉を知る日本人は少ないが、中国人もこうした語彙に外来語性があると知って大変驚く人が大部分であろう。中国語としてきわめて自然な日常語なのである。しかも、これらの言葉は、日本での意味用法と中国語としてのそれとが、大変差異が少ない。異文化への転移があったことを思えば驚くほどの近似性がある。

このような日本語から中国語へという現象から汲み取ることのできる意味はいろいろある。西洋からの転入概念に対応できる言葉が、日本語らしい日本語では作りにくい、つまり和語にはそういう造語性が乏しい、あるいは、西洋から転入した概念は日本でも、中国でももとは一つなのだから、同一語形（漢字表記）の意味の共通性が高いのは当然だ、など。そしてそれぞれ深く考える意義があるだろう。そもそも漢字を操って言葉を使うのは中国から日本に入ったのではないかということもある。しかし、このような日本で漢字表記入語形が作られ中国にも移入されて、今なお日常的に使われている言葉の場合、端的に結果を見れば、こうした言葉を作った日本人は、中国語を作ったという意味を持っている。

このようにして「中国語」を作ることになった日本人は、当時の知識人として漢文の素養があったのであるが、漢文という変種を通してではあるが、それぞれの精神の中に中国語を言葉として深くつかむ辞典を作り持っていたとも見られる。和製英語が、英語圏で通用することはほとんどないことと比べてみると、そうした人の精神内の中国語辞典の優れた力を窺うことができよう。漢文に深い素養がなくても、中国語を直接勉強できる読者のみなさんは、同じように辞典を作る潜在的な能力があるはずである。

以上の拙文を、中国語の勉強に際して、さまざまなレベルで自分の辞典を作ることを考える参考としてもらえれば幸いに思う。

NHKラジオ「まいにち中国語」を担当して

国際コミュニケーション学部
荒 川 清 秀

ＮＨＫ（正確にはＮＨＫエデュケーショナル）から、「一度中国語の学習や教授法についてご意見を伺いたい」という手紙が届いたのは07年の６月のことである。その時は出演依頼ではなく単に意見を聞きに来るということで、若い素敵な女性ディレクターが二人来て、２時間ほど楽しくお話しただけだった。のち、デスクがわざわざ豊橋にまで足を運んでくださり、正式に出演依頼ということになった。ＮＨＫラジオの仕事は、かつて90年に入門編を半年、97年に応用編を３ヶ月やったことがあった。最初の90年は、電話がかかってきたときは正直興奮したが、今回は比較的冷静に受けとめた。前回はまだ40代に入ったところで、わたしもまだ若かったが、それからすでに18年がたっている。年齢から言えば、もうベテランである。へたなことはできない。わたしは、この18年の間に研究、教育の面で蓄積してきたことを少しでもリスナーに伝えたい、そういう厳粛な気持ちで引き受けることにした。

■ テキストをつくる

ＮＨＫのスタッフと２度ほど打ち合わせをしたあと、わたしはテキストの執筆にとりかかった。主人公は脱OLの日本人美香。これは97年の応用編の主人公の名前であるが、この中国語としてのひびきメイシアンがきれいなので今回も使うことにしたのである。スキットはこの美香とその友だちの王玲、そのボーイフレンドの劉旭の三人を中心に展開される。わたしはなぜか（単に女好きだから？）いつも女性を主人公にする。女性の方が、男と違って社会的な制約がなく、場面設定が楽だからだ。ただ、美香と劉旭を中心にすると王玲が嫉妬する。そこで、劉旭はあまり出さないのだが、劉旭はときどき美香をからかい王玲に叱られるというシーンもある。場面は全部で20。美香は留学生という身分にしたが、これはなにか身分がないと不安定なのでそうしただけで、実際に学校の場面が出てくるのは数回しかない。

また、このスキットとは別に４月は前回同様発音特集にした。４週分を全て発音にあてるのである。韓国語ならハングルの読みでまず１ヶ月かける。それと同じで、中国語も発音だけで一月（ひとつき）はほしい。「一月も発音をやればリスナーが逃げる」というネットの雀の声も聞こえてきたが、大方はやはり中国語では発音に一月かけたほうがいいとか、一ヶ月発音を特集するなら聞いてみようという声の方が多かった。スキットの執筆は、あれこれ考えた末に、愛大孔子学院の副学院長としてきていた陸平舟氏にお願いした。陸さんは、自ら小説も書く人だったので、その点を買ったのである。もちろん、最終稿ができるまでには時間がかかった。わたしはまずこの半年で出すべき文法事項を書き出し、さらに日本人が出逢うであろう20の場面を設定した。課によっては、出してほしい文型、表現を書いておいて、それをテキストの本文に書き入れてもらうようにした。それも、もちろん１回で終わったのではなく、スキットができていく過程で、これもいれてほしい、あれも抜けていた、というふうに、要求を何度も出した。陸さんはすぐにそれをテキストのどこかに入れてくれた。

ネイティブスピーカーにテキスト本文を書いてもらう場合、もちろん一人だけでは不安なので、テキスト原稿がほぼできあがると、知り合いの中国人何人かにみてもらってコメントを求めた。そういうときでも、ほとんど直さない人から、「もとの文が変わってしまうから、それ以上はやめて！」と悲鳴をあげるほど手を入れる人もいる。ある部分についておかしいと言う人もいれば、そこは大丈夫だという人もいて、最終的にはわたし自身がどれを取るかを判断しなくてはならなかった。さらに、スキット全体の録音、各課の収録の際に中国人出演者たちから何箇所か修正が入った。

スキットがほぼできた段階で、全体の文法事項分布表をつくった。これはとても有益で、なにがまだ足りないかをたちどころに知ることができた。この表はテキストでは「今月の文法（項目）」「学習進度パロメーター」としていれてもらった。こうしたことはテキストをつくる際、当然しなくてはいけないことだが、ここまで徹底してやったことはこれまでなかった。その意味で、わたし自身今回の仕事を通じてまた一皮むけた気がした。

■　用例を吟味する

用例は自分でも用意したが、今回は陸さんに、一つの文型に10～20の用例を出してもらって、ここからだいたい３～５例を選んだ。このうち、ポイントには３例くらいしか出せないので、あとの２例は練習問題で使ったりした。それでも、気に入った例がないときは、ネットでさがしたりした。一つの文法事項に対する用例は、オーソドックスなものももちろん出すが、それ以外はちょっとひねったもの、含蓄のあるものを出すようにした。そして、そこで一言コメントを加える。これを楽しみに聞いてくれるリスナーも多かったようだ。もっとも、例文を通してみると、“我怕老婆”（わたしは女房が怖い）“老婆不让我进去”（女房が中に入れてくれない）と言った恐妻家の夫の姿がかいま見えるし、“男人一生气就不说话”（男は怒ると口をきかない）“没人给我介绍女朋友”（誰もぼくにガールフレンドを紹介してくれない）のように、男がしいたげられる例が多い。

あと、前回同様、スキットがはじまってからは、最後に「ことわざ」を全部で80つけた。ことわざといっても、故事成語から、俗諺、しゃれことば、古典の文句まで範囲を広くとった。前回と重なるものもあったが、おそらく３分の１はいれかえたような気がする。これも年齢とともに共感するものが違ってきていたからであろう。

■　収録が始まる

90年の時は、１回の放送は20分で月曜から木曜までの４回。今回も放送は月曜から金曜までであるが、１回の放送は15分と短くなった。この５分の違いが番組にどう影響するかは制作スタッフの関心事でもあった。放送の中では、時に中国人出演者とフリートークをするが、これがなかなか入らなくなった。１回の収録時間が予定をオーバーすると、すぐに判断を出さなくてはいけない。練習問題を一つ削るとか、ポイントの３をカットとかいうふうに。最初のうち、フリートークはしばしば削除の対象になった。これは少し残念なことであった。フリートークは最初90年、97年といっしょだった呉志剛さんとすることが多かったが、慣れてくると容文育さんにも合いの手をいれてもらって、なごやかなものになっていった。

中国人出演者の呉志剛さんと容文育さんとともに

収録は１月の終わりから６月の終わりまで、ほぼ隔週（２回は２週続けて）金土と渋谷のＮＨＫ放送センターに通った。朝は10時半集合なので、５時に起き、７時前に家を出る。豊橋７時16分の新幹線に乗り、渋谷のＮＨＫ放送センターに着くのはほぼ10時。新幹線はひかりが速いのだが、混むのでこだまに乗る。しかも、なるべく１号車の最後列に座る。ここだと横に人が乗ってこない区間がある。新幹線の中のおよそ２時間はいわばリハーサルの場だからである。どうしてその前にしないかと言われそうだが、収録以外の時間はもちろん授業があるし、テキストの執筆、数度の校正ゲラの直しに追われ、なかなかそんな時間がとれないからである。前回なら、最初のうちは全部の時間をあらかじめ計ったりしたが、今回はよほど時間がかかると思われる箇所を除き、ほぼ感でやった。とりわけ、収録が始まって３ヵ月ほどたったころからはほぼ時間通りに終われるようになった。編集作業は今ではデジタル化して、咳払いや、とちりはもちろん、かなでいえば数文字分削ったり、貼り付けたりするのはなんでもないようだが、編集作業をなるべく少なくしてもらうのがこちらの腕である。わたしはストップウオッチをもって、これで時間を掌握した。（英会話の遠山顕さんは時計も見ずにほぼ感でやっているそうだ。）

新幹線でのリハーサルは、本番が迫っているだけに、どう説明しようかと悩んでいる箇所でひらめきがあったり、逆にどう説明すべきか急に迷いだしたりすることがあった。それは２日目の土曜の朝の、ホテルから渋谷までの20分間の地下鉄の中でも同じことで、ここで逆にアイディアがひらめいたりする。「窮すれば通ず」である。

前回もそうだったが、金曜の夜は原則人に会わず、またお酒も飲まないという方針をつらぬいた。それはわたしがノドが弱いので、ノドを保護するためである。本番前の打ち合わせも30分はとったが、これもなるべく大きな声を出さないようにして本番に備えた。しかし、本屋には行った。ホテルを湯島にとってあったので、神保町はわたしにとってはあたかも私設図書館だったからだ。収録の中で出てきたいくつかの疑問はそこで解決できた。なお、昼休みも小部屋をとってもらって、そこでノドを休めると同時に午後の予習をした。

さて、10時20分ころには顔がそろって打ち合わせをする。呉さんと容さん以外にディレクターの二人、時にＮＨＫ出版のＫさんが加わって収録の進め方を話し合う。最初進め方の型が決まるまでは、ディレクターのＭさん、出版のＫさんの三人でよく話し合った。二人はリスナーの立場に立って、多くの意見を出してくれた。わたしも不思議にこの二人に言われるとあまり抵抗なく意見を受け容れたのだから不思議だ（美人に弱いから？）。自分でもそういう柔軟性（軟弱性？）が残っているのがうれしかった。前回はある意味放任主義で、ディレクターが自由にやらせてくれた。だから、逆にこんな喜びを味わった記憶がないのである。

収録ではディレクターのＭさんとのやりとりがとても絶妙だった。途中で、わたしが「あ、ここのポイント（１）と（２）を入れ替えますね」とスタジオの中で言っても、たちどころに応じてくれたのである。

■　放送を聞く

人によっては、自分の声など聞くのはおぞましいと言うが、わたしは責任上毎日、しかも朝１番の放送を聞くようにしている（さらに３回再放送がある）。他の語学講座も、内容よりもしゃべり方、進め方を知りたくて聞く。かちかちの人もいれば、ちょっとため口っぽすぎてこれはどうか、と思う人までいろいろいて、参考になる。

娘に言わせればわたしは自己愛が強いから平気で自分の声を何度でも聞けるのだそうだ。もちろん、うまくいったときは繰り返し聞くこともある。それもまったく否定しないが、大事なことは自分がしゃべったことをチェックし反省するためである。90年の時も１度どうしても修正してほしい箇所があり、朝の放送を聞いたあと電話し、直してもらったことがあった。今回もすでに３回直しを入れている。その３回も、なにげに聞けば聞きのがしてしまう箇所だ。担当のＸさんは、毎日朝の放送が終わる８時半になると、携帯にわたしからの電話がはいっていないかハラハラするという。この記事がでるころにはこの緊張から解放されているだろうが。

「体あたり中国語　加油北京オリンピック」の出演者たちとラジオ収録終了のあと出演したテレビの特番

漢文訓読のこと

文　学　部
安　本　　博

嘗て中国の高名な古典の研究者に、中国語ができないのに、中国の古典を研究している不可思議さについて、日本では、訓読という技法があり、漢文を読み解いていると説明をした上で、現代中国語とは殆んど性質を異にする古典中国語即ち漢文の意味を理解するに当たって、どのような読み方をするのかと尋ねたことがあった。

先生曰く、字形を眺め、音を通して読解している、と。

漢文には文法と呼ばれるような法則は殆どないなかでは、このような答えが返ってくるのは、当然の帰結といえば、それまでだが、中国語を読み書きできる者が古典中国語を読みこなすことに難渋していることは、中国人留学生と古典を読んでいて経験済みのことであるから、古典を専門にする研究者の古典読解も、ある意味では、勘で読解していると言っても過言ではないのだろう。

この訓読の技法の発明開発は、日本人が考え出した異国文化受容の優れた対応力というか吸収力の成果の重要な一つであるとの指摘は、漢文を事としていない人と談たまたま漢文や漢字に及んだ時に耳にすることがあり、改めて訓読の技法に想いを致す契機を与えてくれる。

これは、宇佐美一博教授からのご教示であるが、仏国の精神分析研究家のラカン氏（1901～1981）も、日本人の訓読の発明開発について、異文化受容における優れた成果業績であるとの注意を喚起しているとのことである。

まさに……すべし

漢文訓読には一定の決まりのようなものがある。再読文字はその一つである。

表題の「まさに……すべし」と訓があたえられているのは、「当然」「当為」というよく出くわす熟語に用いられているように、「当」が代表的であり、ふつう「まさに然るべし」「まさに為すべし」と訓読する。「当然」は、強く言えば「そうあらねばならぬ」ということでもあるが、「そのような状態にあることがぴったりである」ということであり、「当為」は「そうしなければならない」というのは言うまでもない。

この他、「応」や「合」「会」も「まさに……すべし」と訓ずる再読文字である。最後の「会」は、「会当」とか「会須」と熟して用いられて「まさに……すべし」と訓ぜられることもあれば、「かならず」と訓ずることもある。現代中国語で常用される「応該」は「ねばならない」と解かれ、「応当」も同じ意味で使われる。

殊更なる見解でもなく、コロンブスの卵の事例に属することでもあるが、上に挙げた当・応・合・会・該の諸字は、すべて「ものごとがあるべきこととぴったりあてはまっている」状態を表わすことを意味内容とする漢字である。そのことを表わそうとして古人は「まさに……すべし」と訓じたのである。恐らくこの訓が人々の共通理解を得て定着するまでには紆余曲折があったであろうが、定着してしまうと再読文字という一定の技法を伴って伝承されてきたのだと推測してよかろう。

信　義に近ければ、言　復すべし、恭　礼に近ければ、恥辱を遠ざかる

これは論語学而篇の言葉である。「復」の訓詁については、論語集解は「覆」とし、反復の意味にとり、更に次のように解釈する。「義必ずしも信ならず、信必ずしも義ならざるなり。其の言反復すべきを以て、故に義に近しと曰うなり」と。

義（ただしいこと・社会的妥当性）は信（ことばのまこと）とは限らない、信が義とも限らない、なかで、その言葉を反復することができて、即ち人々の共通の理解する所となって、義が成立するのだ、というのが、古注の基本的理解であろう。義と信とは相互依存の関係にあって一方的に成立するものではない。「当然」とか「当為」とかはそのような内実を持つのが人の世の常であることを理解しての解釈だと言えるだろう。

「恭」と「礼」の関係についても、「恭　礼に合わざれば、礼に非ざるなり。其の能く恥辱を遠ざかるを以て、故に礼に近しと曰うなり」と注す。礼の成立する根拠を「恥辱」という人間の内面を形成する心性の一部に求めていることになる。礼という外在的規範の成立根拠を人間の内面性に求めていると言い換えることもできよう。更に言えば、人間性の外在化したものが礼であるということでもある。

何に恥辱を感じるかは個人差、社会や時代の差がある。恥辱の個人差の両極端は「無恥」と「足恭(すうきょう)」であって、恥無き徒にとっては、礼は成立の根拠を持たない。礼を意識しすぎるか、礼に囚われすぎて他者を意識しすぎる人が足恭の人と評されてしまうのであろう。さすれば、恥と礼とは相互に依存して価値なり、意味を形成していて、いずれか一方のみで固定的な一元的価値を形成するものたり得ないということが含意されているのだと言えよう。「義」といい、「礼」と言っても、固定的一元的な価値体系を持つものではないということを確認したのが古注の立場だったと言えるであろうか。

上に引いた論語の章句は、句読を無視して記せば、「信近於義言可復也恭近於礼遠恥辱也」と書かれる。これを書き下したのが表題の文である。「信」と「義」、「恭」と「礼」の間を一字空白にしたのは、「信義」「恭礼」と熟して読まれることを避けようとしたためである。

間髪を入れず　綺羅星の如し

教育テレビに「ことばおじさん」という番組がある。この番組では日本語の乱れや誤用が問題とされる。たまたま視聴していて関心を惹いたのが表題の誤用や誤解の説明である。

「間髪」を「かんぱつ」と誤読したり、「綺羅星」を「キラ星」と誤解している説明について具体的にどのような説明をしていたのかは、ほぼ忘却の彼方にあるが、確実に記憶していることは、漢文の原文を取り上げて、その訓読に引かれた誤解・誤読であるとの説明がなかったことである。

上引の二つのことばの出自は、漢語の「間不入髪」「綺羅如星」である。少しでも漢文に対する関心と素養があれば、この漢文を書き下すことに伴って生じた誤読であり、誤解であることは容易に推察推量できると思われるが、そうした説明がなかったのは担当者の間に漢文に対して馴染をもつ構成員がいなかったのであろう。

これも「間　髪を入れず」「綺羅　星の如し」と表記すれば、少しは誤読を免れただろうが、古人の常識はそうした表記を必要としなかった。また、「間に髪を入れず」とか「綺羅は星の如し」とでも読み下したり、書き下していれば、後人を迷わせ誤らせることも少なかったのであろうが、先人の言葉に対する感覚はそうした冗漫さに耐えられなかったに違いないのである。

これ以外に「已むを得ず」が取り上げられて、「やむおえず」と誤解してこの言葉の本来の意味を理解していない人がいることが紹介されて、誤解の基づく理由が説明されていた。この場合も漢語に立ち返っての言及はなされなかったが、これも「不得已」という漢語の訓読の素性が忘れられたことによる誤解なのであろう。

かかる類の誤解や誤用には、殊に漢語をもとにした表現については、本質的には漢語と日本語の語順の相異にもとづくのであろうが、日本語の問題として言えば、書き言葉と話し言葉が慣れ親しみすぎたために生じた言語現象の不幸な変質である場合が多いのであろう。

絶体絶命と絶対絶命

状況や状態が危殆に瀕していることを表現する「絶体絶命」は「体を絶ち命を絶つ」と訓ずれば、意味はより明瞭になり、「絶対絶命」と書き誤る恐れは高い確率で減少するであろう。「絶対絶命」と誤記するのは、「絶対」を、全くとか、必ずとか、意味を強める言葉と解したための誤用だと思われるが、この「絶対」も「対(つい)を絶つ」と訓ずれば、その意味はより明白になる。「対を絶つ」とは、向き合うものを持たない、敵対する相手がいないことを意味する表現である。存在を強く意識すれば、絶対なるものは唯一無二なるものとして捉えることになるが、絶対なるものを果てしなく追い求めて追い求め得なくなると無の世界に行くしか道がなくなり、混沌の世界に迷い込むことになるのであろうか。

絶対は絶待とも書くが、「待つを絶つ」であって、向かい合う相手を失っているということに変わりはない。

「対」は対偶と熟して用いられるように、二つそろっていることやものを言う。従って、「絶対」には対偶としての相手を失うという用例もあって、その意味で用いられるとすると「絶対絶命」は、恋人を失って命を絶ったというようにも理解でき、誤った用語と一概に断ずることはできなくなる。

安吾をどう訓ずるか

坂口安吾の命名の由来については不案内であるが、訓読すると幾通りかの読み方ができる。「吾に安んず」と読むのが普通であろうが、「吾を安んぜしめよ」とも読めるし、「吾に安んぜんや」とも読めなくはない。更に「安くんぞ吾ならんや」とか「安くにか吾あらん」とも読むことができる。このように考えると、向き合う確かなものを持たない混沌の世界を彷徨っていたことがこうした名前をつけたのかと妄想してみたくなる。

まだ何十分の一かは生者の側に身を置くものとして訓読の残灯に些かなりとも油を注いでみた。

留学後、留学前に日本ですること

非常勤講師
上　野　由紀子

短期、長期にかかわらず以前に比べて比較的手軽に中国へ留学することができるようになりました。私が教えている社会人向けの講座でも、中国あるいは台湾で駐在員、駐在員の家族として語学研修を受けた人が増えてきました。そういう私も昨年秋から社会人向けの中国人教師の授業を受けていますが、やはりクラスの受講生の半数以上の人が学生時代あるいは比較的若い時期に留学した経験をもっています。私のように学生時代に留学ができなかった世代からすれば、現在のように若い時期に現地で勉強、生活することができるようになったということはとても羨ましいことです。

かれら留学組と一緒に授業をうけると私も大いに刺激を受けます。中国、台湾等で生活し中国人と話した経験によるものでしょうか、かれらの話す中国語には何かしれぬ（中国らしい？）勢いが感じられます。

しかし中には自己紹介で〈我在北京留学了一年〉〈我在上海留学过〉〈我学了汉语三年〉「注1」などと話す人もいて少々驚いてしまいます。ふだん、私は学生に離合詞「注２」や目的語と時間の語順などを教えているので、このような間違いはとても気になるのです。

ただ不思議なのは、留学時代からこういう風に間違って言っても、誰も指摘しなかったかということです。たぶん直されないまま、それが間違いと気がつかないまま言い続けてきたのでしょう。考えてみれば私たちも外国人が間違った日本語を話しても、意味さえ通じていればよい、話のムードを壊さないように、相手に恥をかかさないようにといった理由で、あえて直さないことが多いのではないでしょうか。

留学すれば確かに日本にいるよりはるかに、中国語環境は優れています。常に中国語のシャワーをあび、中国語を話す機会も非常に多いです。ただこのようなよい環境にいても基本をきちんと押さえていなければ、いつまでも初歩的なミスを含む中国語を言い続けることでしょう。中国で学んだ貴重な留学体験を日本に帰国後、どう生かしたらよいのか、また中国へ留学する前に日本で何を勉強したらよいのか、教える立場と習う立場から少し考えてみたいと思います。

質問しない不思議？

中国に留学していた人の話を聞くと、欧米人は授業中に質問を積極的にするようです。教科書を見ればわかるような（？）ことまで聞いて時間を無駄にすると怒っていた人の話を聞いたことがあります。逆に我々日本人はまわりの人に遠慮しすぎなのか、または知らないことを人に知られるのを恥と考えるのかあまり質問をしません。社会人向けのクラスでも、留学組を含めて意外にみんなあまり質問はしないのです。こんな簡単な質問と思い込まず（思われてもいいのです）、質問をすることも話す練習として考えればいいのです。聞くだけの受け身の姿勢で授業を受けるのではなく、わからないなら、わからないなりに一言、二言でもいいから反応する姿勢をもつことです。自分の疑問をうまく言えなくても、きちんとした質問の形になっていなくても、相手がプロの先生だったらある程度あなたが聞きたいことをわかってくれるはずです。

ある知人は中国人に何か尋ねる時、相手が返してくれた言葉をそのままもう一度オウムがえしにして言うそうです。言われた内容を再確認するためですが、シャドーイング「注３」に似ています。自分が聞き取った言葉をもう一度繰り返すと言うのは結構難しいものです。授業中も先生の言った言葉をもう一度繰り返し（できるなら要約して）てみて、先生に再確認してみるのも一つの方法かもしれません。

また日本語を話す人がすべて日本語文法に詳しいわけではないように、ネイティブスピーカーもすべての人が語学のエキスパートではありません。中国は方言が多いし、出身地、年齢、職業等によっても人によって言い方が異なります。共通語との違いを認識しない人も結構多いのです。文法を中国語で説明されるより日本語で書かれた辞書、文法書を読んだ方がわかりやすい場合もあります。私たちは質問する場合、まずネイティブスピーカーに自分が話す中国語が一般的で通じるものかどうかを確認してみましょう。さらに似たような用例をたくさんあげてもらうと理解に役立つと思います。

講読のすすめ

「趣味は？」「好きな食べ物は？」はといったような自己紹介的な会話は楽しいものですがすぐに飽きてしまいます。『凛とした女性の基礎力』（暮らしの手帖社08）の中で坂東真理子さんは日本人の英語について次のように述べています。

> 大事なのは中身です。いくら発音がきれいでも、中身が無いことを滑らかに言っているだけでは誰も聞いてくれません。言うべきことがあり、伝えたいという熱意を持つことが必要です（ｐ183）

英語も中国語ももちろん発音はとても重要です。しかし中身がないと相手は聞いてくれません。中国人は日本人ほど相手の感情を察したり、空気をよむといったようなことはあまりしないように思われます。また自分の考えを比較的はっきり主張します。では自分の考えや思いを相手にわかってもらうためには、どうすればいいのでしょうか。

毎日新聞欧州総局の町田幸彦記者は次のように述べています。

> 英会話が上手になるためにたくさん読むことだ。英語の本や文章を。実は「英語を話せない」と嘆く人々の大半は、英語をきちんと読めていないか、英語の本や記事を読んだことがないはずだ。（発信箱　０７・11・１）

耳から入ってくる言葉は聞き流してしまいがちで、記憶にはあまり残りません。文章を読み、さらにそれを音読して耳で確認するという作業をすることによって、少しずつ記憶が蓄積されていきます。文章をたくさん読めば読むほど記憶の蓄積は多くなりますから（もちろん個人差はあります）、それは会話をする時に大いに役に立ちます。つまり目で見て意味がわからない言葉は、耳で聞いてもわからないは

ずですから。

意味をはっきりさせるために、一度日本語に訳してみましょう。何となく意味がわかるといったムードでやってばかりいると、文字ひとつひとつの意味、働きがみえてきません。副詞、前置詞、接続詞、助詞等の虚詞や補語の使い方や、また日本語との違いにも気をつけましょう。こういう風に一字一字の働きを確認して文章を読む癖をつけていけば、わからないところとわかるところがはっきりしてきます。また疑問もどんどん増えていきます。いくらでも質問することは出てくるはずです。そうなれば大きな進歩です。

原文は小説以外にも、ノンフィクション、雑誌、新聞のエッセー、インタビュー等など面白い内容のものがたくさんあります。ただ中国語は話し言葉と書き言葉が大いに異なるため、なるべく話し言葉で書かれた共通語に近い文章を読む方がよいと思います。自分のレベルにあった、興味がもてるものから読み始めればいいのです。

相手の国を知る

中国で靖国神社参拝問題が問題になっている時、中国に留学中のある日本人学生が中国人に意見を求められました。しかしもともと靖国問題に関心がなかったうえに、中国語読みされた靖国神社の発音を聞き取れなかったため、何も言えなかったそうです。

かつて中国語を勉強することが、現在のように一般的ではない時代が長くありました。今、以前より注目され、身近な言葉になってきたのは喜ばしいことですが、逆に中国に関する知識が少し乏しい人が多いような気がします。言葉の背景にある中国の政治、社会、歴史の知識なしでは理解できないことはとても多いのです。

私が受講している社会人向けの講座では中国の様々な社会問題が教材になっています。中国も高齢化、少子化、収入格差、教育問題等、日本と似たような問題を多く抱えています。しかし背景にある体制、社会制度が異なるため、中国人の先生の説明を受けても理解できないことが少なくないです。

逆に先生に日本の状況を聞かれる場合もありますが、私自身も日本の事情がよくわかっていないため説明に困ることがあり、中国語でどう説明するか、ふだんからシミュレーションしておく必要があります。

特に現代中国を理解するためにはアヘン戦争から文革、改革開放あたりまでの歴史は勉強しておいた方がよいと思います。また「甲午戦争（日清戦争）」のように日本語と言い方が異なるものもあるので注意が必要です。

発音の再確認

私はピンイン、声調はすぐ忘れる方なのでなるべくこまめに辞書を引いて確認するようにしています。自分が教える授業でも学生の発音、声調はなるべく直すことにしています。（直し方がしつこくて、いやがられることも多いのですが）

社会人向けの講座では留学組を含めて読みを間違える人は少なくありません。辞書で確認さえしていればありえないような間違った読み方をする人さえもいます。読みの練習が足りないのです。レベルが上がれば上がるほど、通じさえすればよいということが優先され、発音が軽視されているように思えます。発音は永遠の課題です。たくさん音読をし、少しでも記憶が曖昧なら常に辞書で調べるという習慣を身につけることです。つまるところレベルが上がれば上がるほど、中国語を学び始めた時のように一つ一つ細やかに調べるという謙虚な姿勢が必要になってくるのではないでしょうか。

「注1」

正しくは〈我在北京留了一年学〉

（私は北京に一年留学しました）

〈我在上海留过学〉

（私は上海に留学したことがあります）

〈我学了三年汉.〉〈我学汉.学了三年〉

（私は中国語を三年間勉強しました）

「注２」

２音節動詞のうち離れたり合わさったりできるものを言う。その多くは「動詞＋目的語」構造である。

「注３」

耳から入ってきたままを“shadow（影）”のようについて発音していく方法。中国語については『中国語シャドーイング入門』古川典代(株)ＤＨＣを参照

洋学のふるさとを訪ねて ライデン探訪

経済学部
葛谷　登

2月29日（金）より3月7日（金）まで初めて欧州に行ってまいりました。日頃親しくさせていただいている経済学部の保住敏彦先生がこの期に学会出席と調査研究のためポルトガルとドイツに出張されるということで、わたくしもかねがね欧州に行ってみたいと思っておりましたので、強力な水先案内人を得た思いで、渡欧の意を決したものです。

ただ保住先生とは翌日の土曜日、日本キリシタン史の権威高瀬弘一郎先生に前もってご教示いただいた史跡と本屋さんを回るくらいしかご一緒出来ませんでした。歩き疲れた後、旧市街にあるレストランでファドを聴きながら夕食を保住先生と一緒にすませ、ホテルに戻り休みました。一夜明け、2日（日）になりました。保住先生はドイツのブレーメンへ、わたくしはオランダのライデンに向かうため、リスボンを発ちました。ルフトハンザの飛行機で保住先生と共にフランクフルトまで行き、後はそれぞれ目的地まで乗り継いで別行動です。リスボンでは保住先生と一緒でしたが、これからは一人旅です。

ライデンにて　―漢学研究所―

3月2日（日）夜にアムステルダムのスキポール空港に到着し、タクシーで予約していたホテルに向かいました。ホテルはライデンの郊外にあり、空港からはさほど遠くないものの、ライデンの中心からは離れていました。ホテルで軽い夕食をすませた後、疲れもありそのまま休みました。

ライデンに関しては、近代中国プロテスタント史研究がご専門で現在、明治学院大学にお勤めの渡辺祐子先生より、ご示教を賜わりました。渡辺先生は15年ほど前、家族で2年間、ライデンに滞在されたお方です。わたくしは3月3日（月）に渡辺先生よりいただいたお手紙を頼りに、ライデン大学の漢学研究所に向かうべく、9時過ぎのバスに乗りました。9時過ぎのほうが、9時前より運賃が安くなるのです。わたくしはホテルで入手したライデンの市内地図を頼りに漢学研究所まで辿り着いたのですが、渡辺先生の説明のとおりであったのには感嘆しました。

漢学研究所の門をくぐり、図書室のドアを開け、資料閲覧の便宜を供してくださるように若い男性職員に告げました。その折、この１月に出版されたばかりのわたくしも作成に関わらせていただいた富坂キリスト教センター編『原典現代中国キリスト教資料集』（新教出版社）贈呈したところ、快く受け取っていただきました。わたくしは職員の方に書庫の中を案内していただき、それが終わると閲覧証（Stack Permission）を頂戴しました。神に感謝！！わたくしは自分の関心のある貴重な資料を見つけては、その場で複写させていただくことが出来ました。

漢学研究所の図書室は中国を研究する若い男女の学生が集まり、活気に満ちていました。はるか極東の日本はどうか。若い人たちは中国よりも欧米に目が向いているように感じます。中国に関心を持っていたとしても、それは経済的なものに限定されているのではないでしょうか。しかしライデンの漢学研究所の図書室に集う若い学徒は中国の歴史と文化の万般に亘って関心を持っているようです。むしろ現代の経済的関心は例外のようにさえ感じられます。ヨーロッパでは現代に至るまで地道に着実に中国研究の成果が蓄積されていることを覚えさせられます。日本では中国との物理的距離が近すぎて、中国の政治や経済の現状が日本の若者の中国への関心を大きく左右するようです。かたや中国からはるかに離れた極西のヨーロッパでは若者は現代中国の政治や経済の大波に翻弄されることは少なく、シャヴァンヌやペリオ以来、もっと言えばマッテーオ・リッチ以来の関心を連綿として受け継いでおり、ヨーロッパの中国学の将来は大変明るいものであることを思い至らせてくれました。

現にライデンでは1890年、日本では明治16年の時より、東洋の歴史、言語、地理学、民族誌学に関する専門誌の『通報』(T'oung pao)が間断なく発行され続けています。この学問的蓄積たるや、相当のものがあるでしょう。中国に地理的に近いがゆえに、中国への関心の所在が揺れに揺れた日本に比し、ヨーロッパでは学的対象たる中国への関心の所在の揺れ幅はさほどなく、中国を凝視する焦点はぶれることがなかったのではないでしょうか。であればこそ、ライデンの漢学研究所の図書室には若い学徒の熱気に満ちているのでしょう。かたや日本ではお隣の中国で起きる事件に振り回され、中国への思いは冷却の一途を辿っていると言えないでしょうか。それぱかりではありません。1978年からの中国の開放政策の進展に伴い、欧米の中国研究者は積極的に中国を訪れ、中国の研究者と中国語で直接交流するようになり、それまで世界において中国研究の一大拠点であった日本の牽引車的地位は相対的に低落の一途を辿りつつあるようです。

かつて戦後の一時期、日本には輔仁大学の国際的な中国学研究の専門誌『モニュメンタ·セリカ』の編集所が名古屋の南山大学に置かれていました。現在も尚日本にあり続けていたならば、日本の中国学の世界への発信は大いに様相を異にしていたでしょう。

今やグローバリゼーションで意思疎通の手段は英語が万能であるかの印象を受けます。ライデンでは書かれているものはほとんどオランダ語で、英語は見つけるのが難しい印象を持ちました。英語でたずねれば、英語で答えが返って来るものの、そうでなければオランダ語を知らなくては用が通じません。欧州では現在ユーロ共同体が出来ているものの、そこにあるのはJ·F·ケネディが言うところの「多様性の中の統一」(unity in diversity)でなかったでしょうか。わたくしは漢学研究所の空間において自然に職員の兄姉と互いに中国語をもって意思を通じ合わせるようになりました。それは彼らが中国文化に対して畏敬の念を抱いているが故にこそ、中国語を話すことに文化的価値ありという暗黙の前提が形成されていたからだと思います。漢学研究所の中国研究の本質が大地に根差したものであることを窺わせるものであり、中国学研究の拠点たるのも宜なるかなと思ったことです。

―シーボルトハウス―

ライデンでは朝起きてから食事をすませた後、バスでライデン駅まで出て運河沿いの道を7,8分歩いて漢学研究所に通いました。2日目だったでしょうか、途中運河沿いに目立たぬように右手の建物にシーボルトハウスの看板がかかっていました。ライデンにシーボルトハウスがあることは知っていましたが、今回は行くこともあるまいと諦めておりました。渡辺先生から西周が住んでいた家がRapenburgに面したところにあると教えていただいていましたので、出来れば西周の宿泊していた家は見たいと思っておりました。

シーボルトハウス中庭のシーボルトの胸像

お昼休みに漢学研究所からシーボルトハウスまで行ってみました。5分かかるかかからないかの距離です。中に入ると、かつて立命館大学に留学したことのある職員の方が日本語で応対してくれました。館内の展示物を見て、よくぞここまで集めたと讃嘆措く能わざるところでした。館長のハンス・カイパース(Hans Kuijpers)さんともお話しする機会を得ました。わたくしは尋ねました。

オランダに来て実感しました。オランダは昔から宗教的に寛容で、今でもいろんな人を受け容れています。国際司法裁判所もあり、英米の大国に隠れていて目立ちませんが、自らの信ずる道を歩いて堂々としています。ここへ来てみると、日本が幕末から明治初期に蘭学から英学に転じたのは誤りだったような気がします。小国日本が近代国家のモデルとすべきはイギリスではなく、オランダではなかったでしょうか？

とたずねました。すると、カイパースさんは、

宗教的に寛容？ふーん、どうだか。ただ西オランダではキリスト教は大体カルヴァン主義です。これはオランダ式のカルヴァニズムと言ってよいかもしれません。信仰は一人一人の内面的なものとして自覚して、神に対して責任ある行動を取るように努めます。ただあまり教会に行かないかも知れませんね。「自らを持してよく働くこと」がオランダ人にとって大切だったのです。宗教に寛容というのは、オランダ商人が宗教的背景を気にせず、商売に励んだことと関係があるかも知れません。

近代国家のモデルということについては、日本が蘭学から英学に転じたのも仕方ありません。オランダは鎖国時代の日本に実力以上に大国に見せていたからです。オランダも欧米列強の一つとしてアジアに侵出しています。植民地ではオランダ人は自らの宗教的信念に基づいて行動したと言えるかどうか分かりません。過ぐる大戦ではオランダはお国に攻め込まれて植民地のインドネシアで戦火を交えています。蘭学にこだわる必要もないのではありませんか。

とお答えになりました。わたくしはもっと話を続けたかったのです。というのもオランダは『戦争と平和の法』の著者グロチウスの故国でもあり、グロチウスの思想の骨格は近代自然法であります。しかし近代と自然法は本来あり得ないoxymoron的な関係にあり、このような稀有な思想をプロテスタントの国オランダが近代において開花させたということはオランダ思想の、言うなれば蘭学の深さを物語ると思うからです。またカルヴァン主義とオランダとの関係についてもさらにおたずねしたかったのです。アムステルダム自由大学の創立者で首相にもなったアブラハム・カイパーは近代におけるオランダの代表的カルヴァニストです。オランダにはカルヴァン主義が現在に至るまで息づいています。にもかかわらず、ウェーバーは『プロテスタンティズムと資本主義の精神』の中で「オランダでは、カルヴァン派倫理の実際生活への浸透が比較的少なく、……総じてオランダのピュウリタニズムは蔓延力が小さかった。」（岩波文庫、p.334）と記しています。是か否か？しかし多忙なカイパース館長のお時間をそれ以上、奪うことは出来ません。

わたくしはシーボルトハウスに来館者の販売用に備えられたライデン大学医学史教授ハルメン・ビューケルス『ヒポクラテス日本特使　フィリップ・フランツ・フォン・シーボルトの功績』(N.V. Organon-Oss, 1998)を購入し、職員のディックさんに西周の下宿跡を尋ねました。彼は玄関の外まで出て運河の向こう、南西の斜め前を指し、「あれが西周と津田真道が住んでいた家です」と説明してくれました。オーィと声を張り上げれば聞こえるほどの、大きく手を振れば返してくれるほどの距離です。

Rapenburgの運河
（左岸に西周の下宿、右岸にシーボルトハウス）

シーボルトハウスを出て、漢学研究所に戻り、夕方になってホテルに帰る道すがら、例の西周と津田真道の下宿先の建物を訪ねました。それを示すプレートが津和野と津山によって壁に貼られていました。西周は1862年6月18日に津田真道と共にオランダに向かい、1863年5月18日にライデンに着いています。そして1865年10月14日にライデンを発ち、帰国の途に着いています（植手通有編『日本の名著34　西周　加藤弘之』（中央公論社、1972年、514-515頁）。

シーボルトのほうは、1862年3月に二度めの訪日を終え、オランダに帰ります。そして1863年10月7日にドイツのウェルツブルグに帰りました。（板沢武雄『シーボルト』吉川弘文館、1960年、p.276）。1863年の5月18日から10月7日まで西たちがライデンに到着して不慣れな５か月ほどをシーボルトと西たちは同じ空間を共有するのです。西の『自伝草稿』にそのことを示す記述はない。しかしシーボルトは遠来の日本人留学生の世話が一段落したことを確認して、故国ドイツに帰ったのではないでしょうか。西がそのことを記述していないのは複雑な政治の事情を慮ってのことではないかと思われます。

帰国

短くも長い旅でした。ライデンでは日本語で話せる日本人が身近にいず、心細い思いの日々でした。出発前、アムステルダムに住む大学の大先輩の名前と電話番号をメモしていましたので、帰国前日の朝、スキポール空港の搭乗手続きについてたずねました。電話の彼方に温顔が思い浮かんで慰められたことです。帰国前、少し時間も出来たので、シーボルトハウスで購入した本を眺めていました。そこに「伝統医学へのシーボルトの関心」という章がありました。シーボルトは鍼治療に興味を持ち、鍼灸用の経絡図を持ち帰っています。ところが、西周の後輩で陸軍軍医総監となった森鷗外は「今の社会は鍼の用を認めず」（「鍼科」『鷗外全集』34巻、岩波書店、p.644）と日本の伝統医学を全否定したうえで、西洋近代医学を日本へ受容しようとしました。これは本来の西洋医学には日本の伝統医学を包摂する柔軟さと懐の深さを持つものであるのにもかかわらず、明治日本の医学は硬直的な態度で西洋医学の表層のみを取り入れたことを語るものではないでしょうか。シーボルトの携えた西洋医学の全体を明治日本の医学界が吸収することに努めたとするならば、日本古来の伝統医学も一層の発展を見、日本は西洋医学の発展にも貢献し、近代医学の世界の中で独自の地位を築くことが出来たのではないでしょうか。

わたくしは機上にて様々の妄想に襲われ、いつしか寝入っていました。

2008年度 外国語検定試験奨励金

語学教育研究室では外国語検定試験合格者に奨励金（図書カード）を贈る自主学習支援の制度を設けています。下記により受付しますので、合格者は申し出てください。

1. 対象学生

愛知大学豊橋校舎　学部及び短大の学生
（大学院生、オープンカレッジ・孔子学院生、科目等履修生、研究生は除く）

2. 奨励基準

(1) 英語検定	２級以上
TOEIC	470点以上
TOEFL iBT	50点以上
(2) ドイツ語検定	４級以上
(3) フランス語検定	４級以上
DELF・DALF	Ａ１以上
(4) 中国語検定	４級以上
ＨＳＫ	４級以上
(5) ロシア語検定	４級以上
(6) ハングル検定	４級以上
(7) タイ語検定	４級以上
実用タイ語検定	３級以上
(8) 日本語能力試験	１級
BJTビジネス日本語能力テスト	450点以上

※ 上記以外の外国語検定試験は受付にご相談ください。

3. 受付期間

2009年１月15日（木）～２月14日（土）

4. 手続き

「学生証」及び「合格通知書」を３号館LL自習室カウンターまで持参し、申請してください。

5. 奨励金（図書カード）の交付

受付期間終了後に会議で金額を決定し、本人に通知します。

6. 奨励対象の試験

2008年２月～2009年２月14日の間に合格した検定試験で、同一言語は１試験のみが対象です。ただし、本年度入学生は入学後受験したものに限ります。

（注）以下の試験は対象ではありません。
TOEFL ITP、TOEIC IP、ｶﾚｯｼﾞTOEIC